



道標



龍族

RYUZOKU

第 9 号

南天会
平成 29 年
3 月 31 日

歴史を知らざる者は 歴史をつくることは出来ない
アンバードカル博士の言葉として佐々井上人がよく口にする至言である。佐々井上人にとって歴史とは、自分の歩む道そのもの

だ。岡山の山間の集落に生まれた一個の人間が、アジアの地表を歩き回りのた打ち回りして南天龍宮城に辿り着き、インド仏教徒の指導者として日々たゆまぬ菩薩道を歩き続けている。しかしふと我に返ってみるとインドのど真ん中でたった一人いる自分とは

何者なのかという疑問が浮かんできた。「なんで自分だけ島流しに遭ったようにこんなところにいるのか？ いったいこれはどういうことなんだ！」

ということ、佐々井秀嶺一大事の歴史探求が始まったのである。仏書歴史書を渉覧し、古地名跡を訪ね、メソポタミア文明から平家伝説まで自身に連なるあらゆる歴史を追求する。そこで出逢う人々、訪れた場所、一片の文章がこの道の来し方行く末を指し示す重要な手がかりとなる。その一つ一つが佐々井上人菩薩道の道標なのだ。

何度かの帰国来日では、佐々井上人の背後に連なる長大な歴史の道標を探し訪ねる旅となる。全国各地を訪ね歩き、だれも見向きもしないようなやがて隠れ行く歴史の命をつなぐ。それらが徐々に佐々井上人の道の姿を現していく。それはまさしく龍のように歴史の大海の中に横たわっているのだ。いよいよ一大因縁が明らかになる日は近い。

「汝速やかに南天龍宮城へ行け」
龍樹菩薩の言葉の意味とは？ その帰結とは？ 今生きているこの

世界に示された大命題。なるほどこれは、佐々井上人と同じ道を歩む我々龍族にとっても、自らの道を明らかにすることでもある。

限りある命の中で、無限の歴史を明らかにすることは出来ないが、自らが歩くこの道の如何なるものかを知ることが出来るはずだ。佐々井上人に順って龍の如きこの道の本体を見よう。

(写真はナグプール郊外の龍樹菩薩大寺にそびえ立つ佐々井上人感得の龍樹菩薩石像)

(龍族 9 号 目次)

インド僧 佐々井秀嶺	西村馨	2
佐々井上人に魅せられて	中原永昌	7
シルブルより。	平野文興	1.2
ナグプール滞在支援隊	亀井佑二	1.5
インド古代仏教遺跡調査の協力者を募る	岩崎好規	1.6
佐々井秀嶺資料室より	小林三旅	1.8
会計報告		1.9
南天会現況・お知らせ		2.0

インド僧 佐々井秀嶺

「不可触民」とともに生きる日本人僧侶

阪南市 西村馨

南天会の皆様、こんにちは。私は 1984 年 1 月から 3 カ月間インドに滞在し、佐々井上人と仏教徒の皆様の世話になりました。今回寄稿しましたのは、帰国後にある月刊機関誌に掲載されたものです。（一部変えています）拙文で恐縮至極ですが、当時の様子が少しでも伝われば幸いです。

*

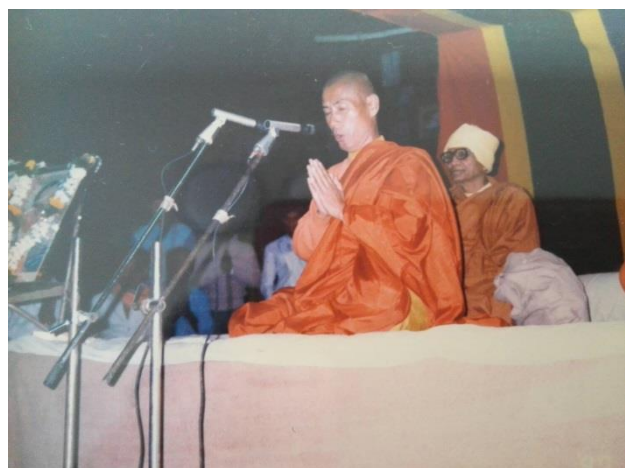
地の底から響いてくるような低い声が流れている。

「ブッダン・サラナン・ガッチャーミ

ー」

あとは何を言っているのか聴き取れない。だが、この読経には音色がある。美しいと感じさせる旋律がある。その音色と、低くしわがれた、しかし圧倒的な迫力をもった音質に、いつしか私は惹きこまれ、言い知れぬ感動が胸に去来するのを感じていた。

読経が終わり、村人からご飯とカレーの質素な（しかし村人にとっては精一杯のごちそうである）食事の施しを受け、帰路につこうとした時、僧を待ち受けていたのは、男たちであり、女たちであり、子どもたちであり、老人



たちであつた。この小さな村のどこにこれだけの人が住んでいるのだろうか。僧に近づくことができた人たちは僧の足元に跪き、地面に伏せ、体中で感謝と尊敬の念を示す。「礼」を繰り返す。赤ん坊を抱いた女性は「礼」の後で、僧に赤ん坊に触れて欲しいと懇願する。周りを取り巻いている人たちは合掌し、「礼」をし、僧との別れを惜しんでいる。僧が一步進むと前方の人波が下がり、後方の人波が迫ってくる。僧に注がれる彼らの眼差し……いや、そんなものじゃない。そう精神エネルギーとでもいおうか。何百人という人たちの感謝と尊敬、敬愛のエネルギー

ー……を前に、私はただ現実の中にいた。

佐々井上人を訪ねて

僧の名は佐々井秀嶺。私が佐々井上人を知ったのは「不可触民の道」（山際素男著）という本によってであつた。「不可触民」とは、インド社会で最下層におかれ、他の人々から触れれば穢れると忌み嫌われ、さまざまな非人間的な扱いを受けている人々である。

「この「不可触民」とともに、中央インドのナグプールという地で十五年以上も暮らし、仏教を説いている日本人僧がいる」ことが、この本に記されてあつた。当時大学院に在籍し、インドのカースト制、とくに「不可触民」についての研究をすすめたいと考えていた私にとって、この本は衝撃であつた。夏の日の気温が五十度にも達するナグプールの気候、日に一度の食事もライスとダール（豆汁）だけという「不可触民」の生活……。その行為が並々ならぬものであることは、私にも容易に理解できた。「一体どんな人物なんだ」。私はこの好奇心に取り憑かれた。

山際氏に佐々井上人の住所を尋ね、手紙を出し、返事を待たずにインドへ飛んだ。インドは初めてだったが、過

去三度、海外を一人歩きしていた経験が役立つた。

日本を經つて五日目に、ナグプールの佐々井上人の寺に着いた。そこで最初に私を迎えてくれたのは、九歳のお坊さんだつた。彼は私に英語で話しかけてきた。ここナグプールで通常話される言葉は、マラティーだ。彼はマラティー、ヒンディー、英語の三つの言葉を話すことができた。

「やあ、よく来ましたね」

低くドスのきいた声、佐々井上人の第一声であつた。ニコニコ微笑みながら、「長旅で疲れたでしょう」と、貴重な日本製のインスタント・ラーメンを作ってくれる、人懐っこい気さくな人柄。しかし、相対して真剣に話す時には、体中から周りの空気を圧する「氣」が、ほとばしってくる。

「私たちは仏教徒です」

その夜から私は、佐々井上人の寺で仏教徒と寝食を共にすることとなつた。「佐々井上人の国から自分たちのことを学びに来た者」となつた私が、仏教徒たちと親しくなるのに時間はいかからなかつた。彼らは苦しい生活に招いていろいろな話を聞かせてくれた。

「私たちは『不可触民』じゃない。私たちは、仏教徒です」

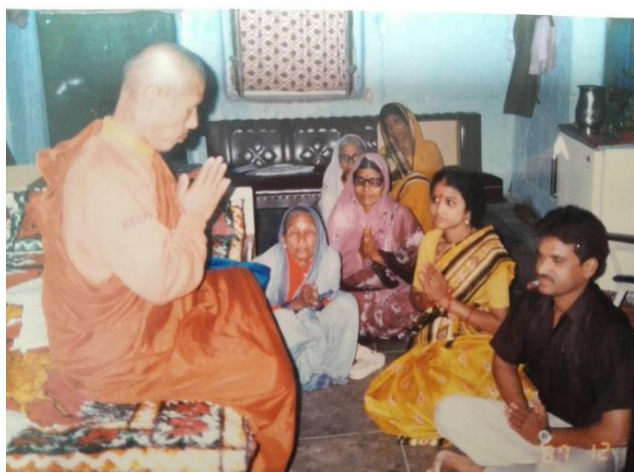
寺の近所に住んでいる大学生、クナル・テラング君が、開口一番に放ったこの言葉に、彼らの思いのすべてが凝縮されている。

「私たちは仏教徒です。1956年に私の両親をはじめ多くの人たちが、アンベードカル博士とともに仏教に改宗したのです。それ以前は、私の両親はヒンドゥー教徒で、『不可触民』でしたが・・・」

「アンベードカル博士」。この名前をインド滞在中に何度聞いたことだろう。「不可触民」でありながら、その努力と幸運によって高い教養を身につけたアンベードカルは、大衆運動の指導者として、弁護士として、政治家として、『不可触民』の地位向上のため多大な仕事を成し遂げた。インド共和国憲法も彼の尽力によって作り上げられたのである。この憲法は、『不可触民』に対する差別の廃止と人間の平等を謳っている。何千年もの間続いていた『差別の呪い』が、この憲法によって法的に葬り去られたのであった。しかし、クナルたち仏教徒は、彼の最大の業績は仏教への改宗であるという。

「博士は私たちに人間としての誇りを与え、進むべき道を示してくれたのです。博士はこう言いました。

『私たちは何千年の間、ひどい虐待や差別に耐え、敬虔なヒンドゥー教徒であり続け、ヒンドゥー社会に奉仕し続けてきた。しかし、それに対してヒンドゥー社会はわれわれに何をしてくれただろうか。正当な報酬の代わりに、私たちに社会的無資格が与えられているのだ。私たちは自らが信じる神が祀ってある寺院に入ることを許されていない。私たちは、他の人々が使う井戸や集会場などの公共の施設の使用を許されない。このように信者



を人間として扱わない宗教は、宗教の名に値しない。私たちは自分たちを人間として扱わない宗教を捨て、新たな宗教、自由と平等と友愛の精神を持った仏教へ改宗しようではないか』と。また博士は、『闘え！『不可触民』

自らの手によってのみ差別を払拭することができるとだ。命がけで勉強しろ！差別と闘う力を身につけろ！』とも言いました。だからこの村の仏教徒たちは、貧しく食べる物がなくても学校へは行きます。仏教徒の児童の就学率は100%です」

こう語って、クナルはニッコリと微笑んだ。奥から妹のスジャータが食事を持って入ってきた。チャパティとカリフラワーのカレーとダール、ご馳走である。談笑しながら妹の方を見るクナルの横顔からは、話をしていた際の鋭い眼光と他を圧する迫力は消え失せていた。

インドの大多数の人々が信仰しているヒンドゥー教。そのヒンドゥー教の聖典は『神から与えられた身分』や『穢れを持った民（不可触民）』を説いている。インドの身分制度であるカースト制度は、このヒンドゥー教を基本的理念としている。そのカースト制度を大きな柱の一つとして、ヒンドゥー社会、すなわちインド社会が成り

立っている。

アンベードカル博士は、このことを見抜き、『不可触民』たちに『現実の差別』と闘う道を示したのであった。

日夜活動する僧侶

「佐々井上人についてはどう思いますか」

食後のチャイ（ミルクティー）を飲みながら、私は尋ねた。弛んでいた彼の頬が引き締まり、真顔になった。先ほどの眼光と迫力が戻っている。

「彼は遠い国、日本から仏教を広めるためにやってきました。彼は他のお坊さんと違って、実際に毎日忙しく活



動しています。そしてアンベードカル博士と同じように、自由と平等と友愛の立場に立って教えを説いています。彼は不平等なヒンドゥー教を打ち破るために、日夜活動しています。私たちは心から彼を尊敬しています。この村の人たちだけでなく、彼を知る人はみな、彼を敬愛しています」

「なるほど」と頷いて、私はチャイを啜った。彼も一息ついて、チャイを飲んだ。

「ところで、あなたは仏教徒ですか」突然の彼の質問に、私は、答えに窮してしまった。差別戒名事件、宗派争い、営利的な寺・・・私が日本で見聞していた「仏教」と、このインド仏教とは、あまりにも違いすぎる。

「私の祖父母は仏教徒だ。しかし、日本の仏教徒とインドの仏教とは違う。私はインドの仏教が好きだ」

あいまいな、的を射ない答えだ。しかし、彼はそれ以上尋ねなかった。

警官に取り巻かれた除幕式

寺に厄介になって、十日が過ぎた。「少し遠い村で、一泊しなきゃいけません、行きますか？」

朝のお勤めの後、佐々井上人が言った。これまでに二度、佐々井上人とともに村に行く機会があった。冒頭に述

べたのは、その際の光景である。しかし、今回は少々様子が違った。

「ただし、危険ですよ」

上人の目が、ギリリと私をのぞきこんだ。

「行きます。ぜひ！」

願ってもない。危険があるということとは、そこに生々しい現実がある、ということだ。

「何が待っているのだろう」。佐々井上人から何の説明もなかったことが、私の好奇心をいっそう強くかきたてた。

ナグプールから西へ156キロ、急行バスで六時間といったところに、アムラバティという町がある。そこから南へ4キロ、オート・リキシャ（自動三輪車）と徒歩で一時間いったところに、めざす村、スクリがあった。

家並みの周りに、ずいぶんと人がいる。手に何かを持っている・・・銃だ！制服姿の警官が、銃を持って村の入り口を取り囲んでいる。何十人いるのだろうか。警官の敵意に満ちた視線を浴びながら、しかし佐々井上人は堂々と臆することなく村へ入る。村内でも武装警官が、道の両端に立ち並んでいる。

広場に出た。そこには千人を超える民衆が待っていた。その民衆の周りを

取り囲む無数の制服と銃。空気は殺気立っている。佐々井上人は、広場に作られた演壇に登った。

例の低い声、周りの民衆や警官の群れを圧倒する迫力で、佐々井上人の説教が始まった。広場は不気味なほど静まりかえり、低い声だけが響く。説教を終えると上人は、広場に建てられてある仏陀の像にかかっていた幕を、読経とともに取り去った。民衆からは安堵のため息が洩れ、喜びの表情が見えた。何事もなく除幕式が終わった・・・

次の瞬間、一人の男が壇上へ登った。顎髭を蓄え、異様に輝く眼を持った男。民衆は歓迎の声をあげた。警官は壇上に銃を向け、男を捕らえようとする。民衆は阻止しようと警官に詰め寄る。銃口は民衆へ向けられた。

「撃たれる！」

次の瞬間の光景を思い浮かべ、私は一瞬恐怖を感じた。しかし、周りの民衆の表情が、私の恐怖感を消し去った。「怒り」、そう、これは怒りの表情だ。人間の顔が、これほどまでに「怒れる」ものだということを私は初めて知った。十歳くらいであろう少女の目にも、虎のような迫力があつた。

壇上の男が民衆を静めた。警官も発砲しなかった。数分後、男は静かに演

説を始めた。

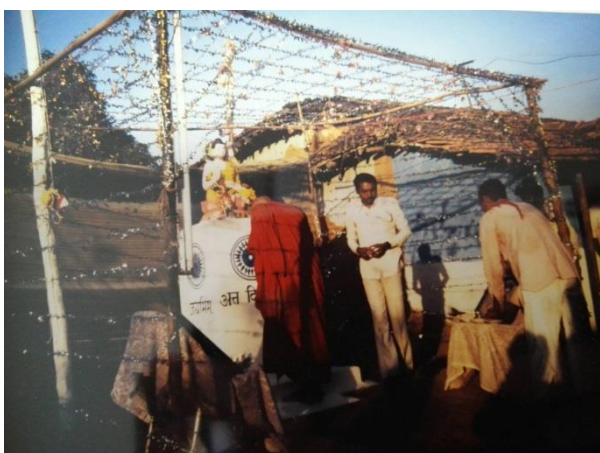
アンベードカル銅像撤去に抗議

「一時はどうなることかと思いましたよ」

村人の家でヨーグルトカレーとライスの夕食をいただきながら、私は佐々井上人に話しかけた。

「私の行くところでは、よく警官が歓迎してくれるんですよ。ハッハッハ」あの騒動の折、壇上で微動だにしないかた態度、そしてこの言葉。私はあきれ果てて上人の笑い顔を見ていた。教師志望の村の青年が、今夜の事情を説明してくれた。

「数か月前に私たちは、アンベード



カルと仏陀の像をこの広場に建てたんです。それに対して、カースト・ヒンドゥー（「不可触民」以外のヒンドゥー教徒）たちが文句を言ってきたんですよ。彼らには彼らの寺が、この村内にあるんです。それなのに周りが仏教徒の家に囲まれているこの広場に、像を建てることを許さないというんですよ。私たちは断固として撤去に応じませんでした。それから毎日、十五、六名の警官が像の周りを警備し始めました。でも警官はカースト・ヒンドゥーの味方なんです。

一週間前のことです。午前三時頃、千五百名の警官が来ました。そして二、三名ずつ各家の戸口に銃を持って立ち、住民を外に出られないようにしておいて、アンベードカルの像を取り去ってしまったんです。もちろん私たちは抗議しました。でも受け入れられませんでした。そこで私たちは今日、仏陀の像だけの除幕式をすることにしましたのです。そしてあと五日経つてもアンベードカルの像が返されない場合は、無期限の断食に入ることを決定しました。断食による抗議には、この村の仏教徒だけじゃなく、アムラバティの町の仏教徒も参加する予定です。そうなれば、ものすごい騒ぎになりますよ」

こう言って彼はニヤリと笑った。

命懸けの仏教への改宗

「彼らは常に命懸けなんですよ」

つたない英語で Sorry を繰り返しながら話を聞いている私を見かねたのか、佐々井上人が説明してくれた。

「そもそも「不可触民」が仏教へ改宗する、ということ自体が命懸けなんです。仏教への改宗は、彼らが従来の自らの立場を否定することを意味しています。だから彼らは改宗後に、それまで強いられてきた不浄とされる職を放棄する場合がありますよ。そうなると「不可触民」の存在ゆえに成り立っていた村落の自給自足の経済も破綻を来すし、伝統的秩序も乱れることになる。だからカースト・ヒンドゥーたちは「不可触民」の仏教徒への改宗を、暴力や経済的ボイコット（売らない、買わない）などによって阻止しようとするのが常なんです。このような迫害を覚悟の上で、カースト・ヒンドゥーたちと闘いながら、「不可触民」は仏教徒となるんですよ。そして仏教徒となった後も、よりむごい迫害と闘い続けているんです。だから彼らはもともと命なんて捨ててかかっていくんですよ」

平然と淡々と話される。その感覚が伝染したのか、いつしか私も平然と受

け答えていた。

「分かりました。それで今日のような騒ぎになったんですね。で、あの髭面の男は一体何者なんですか」

「彼はジョゲンドラ・カワデといいましてね。アンベードカルの教えに基づいて解放運動を推し進めようとする仏教徒組織の一つである「被抑圧民解放軍」の親分です。今までに二百回ほどの逮捕歴があるそうですよ」

その親分は、つい十分ほど前、警官との話を終えてここに来、佐々井上人の前に跪き、「礼」をして去っていった。そういえばインド最大の解放運動組織であるバムセフ・DSF の委員長カ



ンシ・ラム氏も、数日前、ナグプールに來た際には、佐々井上人の寺に來、「礼」をしてから談笑して帰った。そのことを佐々井上人に言うとうと、

「私は坊さんですから、みな「礼」をするんですよ」とサラリと言いい、さらに、

「カワデ氏やラム氏のように、解放運動に命を懸けている人は、他にも大勢いますよ」と語った。

「インドは今、地の底から生まれ変わるうとしている」私はこう感じた。

汝、南天竜宮へ行け

スクリ村から帰って三日目。私と佐々井上人は、カルカッタへ向かう車中にいた。私たちの向かいの座席には、若い女性が座っていた。

「インドの女性って魅力的ですねえ」そんな私の言葉から女性の話に花が咲いた。私と二人だけでくつろいでいる時の佐々井上人は、民衆の前で説教をする時とはまったく別人のようだ。

「私は若い時、女性問題でずいぶん悩みましてねえ。業の深い人間なんです。まあ詳しい話は勘弁してください。誰だって自分の嫌な過去は思い出したくないし、話すのも恥ずかしいものですから・・・」

しかし、日頃は早朝から夜遅くまで活動している佐々井上人の話を聞くのは、この機会を逃してはない、と、私は前夜から手ぐすねを引いていたのである。

修行僧時代に神と仏について悩み、乗鞍岳の頂で死と隣り合わせの一夜を過ごし、「われ、自然と一体なり」の悟りを得た話。修行のためにタイに渡ったが、そこで女性問題を起こし、ビルマを経てインドへ来たこと、インドでは一年間、ラージギールの日本山妙法寺で修行をしたこと。金縛りの状態のなか、眼前に現れた光を放つ白髪の老人の「汝、南天竜宮へ行け」の一言で、右も左も分らないナグプールへ来る決意をしたこと。など、波乱万丈の半生は、車中の夜の物語としては最適であった。

翌朝、カルカッタに着いた。駅にはチョードリ氏が出迎えに来ていた。彼はカルカッタ市内の伝統的仏教徒（アンベードカルの影響で改宗したのではなく、先祖代々の仏教徒）である。カルカッタ大学のエンジニアコースを卒業。現在会社を経営している。彼もまた佐々井上人を尊敬する一人だ。

なく、実際に村々を回り、布教活動をしています。私は彼にベンガル地方に来てくれるように、前々から懇願しているんです」

仏の道を説くのが私の使命

翌日、予定されていた仕事が延期になり、私は佐々井上人と一日中話せることとなった。

「インドに来てもう二十年近く経ちましたなあ。最近になって、ようやくインドというものが分かってきましたよ」

佐々井上人が、感慨深げに語った。

「佐々井上人は、もう日本に帰るつもりはないのですか。神がかり的なお告げによってナグプールに来たことは分かりましたが、それから二十年近くも住みついてるのはなぜですか」

私は、日本を発つ以前から抱いていた疑問を尋ねてみた。

「私が来た時、ナグプールには仏教徒はいましたが、仏教を説く僧がいなかったし、仏教の寺もなかったんです。アンベードカルの導きで、彼らは仏教へと改宗しました。しかしアンベードカルは、仏教改宗の二か月後に、この世を去りました。偉大な指導者を失い、文字を知らない彼らには、仏教を学ぶ

術もなかったのです。そんなところへ、私が来たのです。彼らには仏教を説く僧が、仏法を広める僧が必要なのです。それに、仏の道を人々に説くことが、僧となった私の使命です」

なるほど。僧とは元来こういうものなんだ。当たり前のことなのだろうが、私には新鮮な発見であった。

アンベードカルの全行動が仏教

「アンベードカルの仏教を、どう思いますか」

日本人の仏教僧である佐々井上人が、インドの仏教をどう考えているのだろうか、ということにも興味があった。

「アンベードカルの全行動が仏教である。私はこう思っています」

きっぱりと言い放ち、私の目を見据えてから話を続けた。

「アンベードカルの仏教のことを、アンベードカル教だとか、自分の都合のよいように仏教を変えているとか、批判する者が、日本やビルマにいます。それはアンベードカルが『良い行いをしなさい。良い言葉を話しなさい。良いことを考えなさい。憎しみ合ってはならない。人はみな平等なんだ』なんてことを強調して、いわゆる『悟り』について言及していないからなんです。

す。私も最初のうちは『何だ。こりゃあ、くだらん仏教だ』なんて思ってたんですよ。しかしね。インドに住んで、現実を見て、十年、十五年経って分かってきたんです。

いかに理想が高遠であっても、立派な悟りの境地があっても、一部の修行僧だけがたどりつけるもんじゃあ、現実の社会では何の役にも立たないので。たとえ理想が幼稚であっても、現実には友愛で結ばれた社会を創ろうとするものであれば、それこそが本当の宗教であろうと。こう私は思います。

「人間と人間が互いに和合していく誓いを創っていく」ことが、私は仏教の本質だと思います。その意味において、アンベードカルの全行動がすなわち仏教であり、彼の言葉・思想は、このインド社会の現実のなかにあって、光り輝く人間復活を謳いあげたものなんです」

この話は、拔群の説得力で私の心を捉えた。また、「インドの現実を見た者にしか感じ得ぬ思い」をわずかでも共有できた気になり、無邪気に喜びを感じていた。

世界の宗教を一つにする

「佐々井上人は、他の宗教をどう思っていますか」

他宗をこっぴどくけなす日本の宗教者との違い、にも興味があつた。

「私には目標があるんですよ。それはね……。世界の宗教を一つにすることです」

「えー。そんなことができるんですか」

思いがけない言葉に、ますます惹きつけられる。佐々井上人は、静かに話を続けた。

「真理はひとつ。私はこう思うんですよ。仏教、キリスト教、回教、いろんな道はあっても真理はひとつです。山に登るのに多くの道があっても、頂上はひとつ。それと同じです。その真理を簡単なお勤めの言葉で表し、そしてその真理を解説する体系だった教義を創ること。あと十年ほどしたら、一人どこか山にでもこもって、じっくりとこの仕事をやってみたいですなあ。しかし、情に弱い私のことだから、仏教徒たちに泣きつかれたら、結局、民衆の中で一生を終わっちゃうかもしませんねえ。ハッハッハ」

宗派や宗教の違いなどまったく気にもとめないばかりか、真理はひとつ、宗教はひとつ、と言う。行動も思想もスケールがでかい。「豪傑」……宗教家にはふさわしくない言葉が、私の頭に浮かんだ。

ブッダガヤにインド寺を

1984年3月24、25日の両日に開催された「全インド比丘サンガ」で佐々井上人は、ブッダガヤにインド寺を建立する建設委員長に選出された。総工費六億円の大事業である。

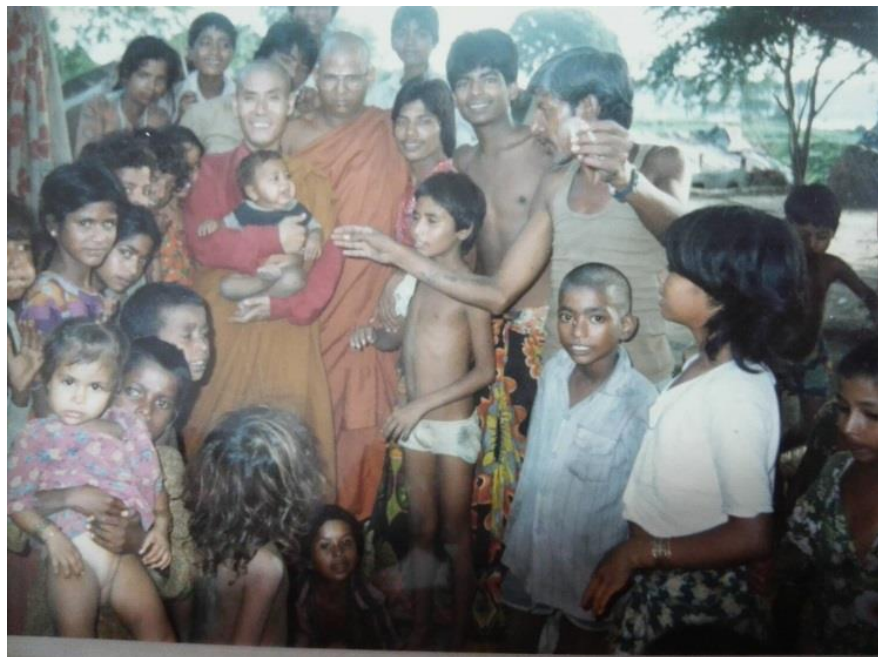
「お釈迦様が悟りを開いたこの地に、日本やスリランカやビルマやタイなどの外国のお寺はあるが、インドの寺がないんですよ。私はこの地にインドの寺を建て、そこを僧侶養成根本道場として、インド全土に仏教を広める拠点としたい。やりますよ」

佐々井上人は、力強く決意を語ってくれた。

「大部分がもと『不可触民』の仏教徒から、六億円もの大金が集められるのだろうか。一体どうやって……」

しかし、私はもう尋ねなかった。もし尋ねても返ってくる答えは決まっている。

「名もいらん。金もいらん。命もいらん。すべてを捨てて、火の玉となって行動すれば、必ず道は開ける」この鉄の信念が、佐々井上人の二十年を支えてきた



のだ。先の見通しが立たなければ動かないようなら、もともと佐々井上人はナグプールに来ていない。また、不可能を可能にしようとする情熱と信念なくしては、社会を変える土台作りはできない。

三カ月のインド滞在の間に、私もこの程度のことは分かるようになってきていた。

(了)

(2月4日～9日の南天会主催ナグプール旅行感想文です。)

佐々井上人に魅せられて

岡山市 中原永昌

私が、佐々井上人を知ったきっかけは、『脱原発をめざす仏教者ネットワーク岡山』で共に活動し、真言宗教理等も学ばせて頂いている佐伯隆快師から「インドに凄なお坊さんがいる……」と言われ興味がわき、『求道者』と愛と憎しみのインド』を読んだのが始まりだった。

ちょうど、京都仁和寺(真言宗御室派本山)へ入門し、修行する前であった。八日間にも及ぶ、妙法寺式断食の完遂……不可触民に対するすさまじい差別との闘い……龍樹菩薩に導かれて南天铁塔と目されるマンセル遺跡を発掘……その数々の功績にただただ目を奪われました。「現代にこんな人がいるなんて……」頭が下がる思いになった。その後、程なくして、一年間の修行の日々が始まった。修行中、長時間の正座や、厳しい戒律を順守するため、相当の忍耐力が養われた。食欲・怠惰・睡眠……一〇八の煩惱を滅し、仏と一体になる……。これほど難しいことはかつて経験したことがな

かった……。ただただ必死に毎日をこなすことで精一杯……。なんとか修行を終えることができた……。しかし、全ての煩惱を滅することはできなかった。逆に、生に対する執着が強くなった部分も感じ、まだまだ修行が足りない……。と心残りもある。ただ、自分ひとりの力ではここまで至れなかっただろう……。不思議に感じる。家族や師僧の支えや、当山本尊毘沙門天王様をはじめ、様々な仏様の御加護があったからこそ、無事に乗り越えられたのだと、深く感謝の念を抱いている。

そんな中、佐伯さんから「印度へ行って、佐々井上人に会ってみたいか？」とお誘いを受けた。また、同じく『脱原発をめざす仏教者ネットワーク岡山』で活動する宮本龍門師からは、「菩薩がこの世にいると実感できる……」と言われ、強く魅かれるようになった。ありがたいことに、家族が承諾してくれ、人生初の渡印が決まった。

二月六日、印度中部のチャティスガル州にある、「ドウンガルガル」という町で「世界仏教徒大会」が開かれる。それに合わせ、日本を出発するため、二月三日に節分会を開く寺院は大変だ……。共に印度へ行く佐伯さんは、毎年逃げるように日本を後にする、とおっしゃられていた。そんな事情があつ



たからか、今回の参拝団は四名（内僧侶二名）にとどまった。

二月四日、関西国際空港から、香港経由、ニューデリー行きの飛行機（エアーインディア）に搭乗し、佐々井上人のもとへ向かった。片道九時間の予定だったが、乱気流の影響もあって到着が二時間ほど遅れた。入国審査を終えて、ホテルに到着したのは深夜十二時過ぎ……。翌日は五時四十五分のデリー→ライプール行きの飛行機へ搭乗するため、四時にはホテルを出発。時差ぼけや長旅の疲れをとる余裕はない、ハードなスケジュールだった。

二月五日、二時間程度の仮眠をとりホテルを出発。わずかな滞在しかできなかったこの「ウエルカムドゥワルカホテル」はホテルオークラ並のハイクラス……。この旅の中では最も豪華なホテルだったのではないかと思う。なぜ二時間程度の仮眠に、旅行会社はここを選んだのか……。不思議だった。それはさておき、い

よいよ佐々井上人と対面するためデリーからライプールへ飛行機で向かった。

デリーとはうってかわり、チャティスガル州ライプールは田園地帯が広がるのどかな風景が広がる町。日本とは違って山や丘が全く見当たらない……。地平線が見渡せるほど、広大な平原が広がっていた。

空港へ降り立つと、正面ゲートで佐々井上人、滞在支援隊の亀井さん、現地の方々が、待っていて下さった。このとき、初めて佐々井上人にお会いすることが出来た。なんと挨拶したらいいものか……。飛行機の中で色々と考えていたが、緊張と時差ぼけで全く頭が働かず、簡単な自己紹介しかできなかった。しかし、佐々井上人は「よく来てくれた！」と満面の笑みを浮かべ、花の首飾りを掛けて、歓迎して下さいました。何とも言えない安心感につつまれたのを覚えている。一時は生死をさまよう危篤状態に陥られたそうだが、現在は地元の方々の支えや、南天会の現地派遣隊による付添の結果、随分と回復したとのこと。腎臓不全のためむくんでいたところとは打って変り、引き締まった体で、声に迫力もあった。先導して下さった佐伯さんも、元氣そうな姿をみて一安心されていた様だった。



その後、シルプールへ車で移動。チャティスガル州が世界遺産として登録をめざす、シルプール大遺跡を見学した。南北にまたがる大河、マハーナディ南岸に位置するこの古代都市遺跡は、紀元四世紀頃から十世紀にかけて、仏教寺院やヒンドゥー教寺院が混在する宗教都市として栄えていたこと。千九百年代、シルプールを訪れた佐々井上人はこの遺跡の重要性を認識し、仏教徒から資金を集め、インド考古学局のA・K・シャルマ氏に依頼して発掘調査を行ったそうだ。遺跡を見学させていただくと、様々な仏像や遺跡がみられた。なかには、首を切られた像や、仏教寺院だったものが、ヒンドゥー教寺院へ改造されていたりと、宗教的対立による激しい争いがあつたことがうかがい知れた。

修復したものが大半とも言われているが、佐々井上人が発掘された、『サイ・マハービハーラ』（現在は、テイヴァアラデーヴァ・ビハーラに改称されている）をはじめ、仏教的に貴重な像や遺跡が数多く存在している。京都種智院大学名誉教授の頼富本宏先生も、文科省の援助を受け、発掘調査に深く関わられ、日本の仏教会もその重要性を認識している。（一昨年、惜しまれながら日本で遷化。）

チャティスガル州の経済にとつても、貴重な観光資源として期待されている。しかし、州政府第一党のBJPはヒンドゥー至上主義の立場から、シルプール遺跡をヒンドゥー遺跡に位置づけ、仏教徒の意向を無視した発掘を進めたそうだ。佐々井上人いわく、発掘中、仏教遺跡であることを示す証拠となる石板が数多く出土したが、州政府の強引な手法によって隠蔽されたという。現在、佐々井上人をはじめとする現地の仏教教会は、仏教遺跡として正当な調査が行われるよう、様々な働きかけをおこなっているようだ。

日本と違い、印度ではヒンドゥー教のカースト制度による根深い差別が

今も残っているという。なかでも、（人口の七割程度を占める）奴隷階級「スードラ」やそれ以下の扱いを受ける不可触民（ダリット）への差別は酷いという：。佐伯さんからこんな一例を聞いた。東部ジャールカンド州・ジャドウゴダの先住民は、インド政府主導のウラン鉱山開発のため、土地を奪われウラン鉱山で労働することを余儀なくされている。劣悪な環境の中、粗末なマスク程の保護具しか与えられず、作業に従事しているため、肺ガンなどで次々に倒れてしまう。またウラン鉱山から出る廃液により水源が汚染されている。その危険性を全く知らない周辺住民たちは、家畜へ水を与えたり、洗濯や炊事を行なっているという。当然ながら、健康被害は深刻で、奇形児や若くして亡くなる方が、後を絶たないという。熱心にヒンドゥー教を信仰している住民たちは「前世は悪人だったからこうなった」「神の仕業だ」と信じて疑わない。目を覆いたくなるような酷い状態だが、日本も他人ごとではない：。原発事故の収束や検証が十分でない中、再稼働へ踏切った。この間に南海トラフ・首都直下地震をはじめとする巨大地震により、過酷事故が起きてしまったら、日本人が住めなくなる：。

インドでは『ブッダの微笑み』と名づけ、初の核実験を行った。日本は国内唯一の高速増殖炉を『文殊』と名付け原子力政策を推し進めた。仏教諸仏の名を借りれば許されると思っているのか：。ウラン採掘から原発作業者を被爆させ、未来の人々へ、放射能の脅威を与え続ける「原子力」の非人道性に対し、仏教は真つ向から反対していると、私は思う。



話が原発問題へ逸れてしまったが、二月六日、ダウンガルガルで開催される世界仏教徒大会へ向かった。前日からの疲れが取れきれない中、早朝四時

話

にホテルを出発。前日の夜から食欲がなくなっていた私だが、道中立ち寄った屋台の朝食をおいしくいただき、元氣を取り戻した。車で三時間程度走り、雄大な草原が広がるダウンガルガルの町へ到着。この街には、シーク教やジャイナ教といったインドではマイノリティーな宗教団体が巡礼地とし、大規模な集会をひらいているようだ。到着すると、早朝にもかかわらず、一万人を超える仏教徒の方々が集まり、今か今かと開催を待ちわびていた。我々は開催まで時間があつたため、大会関係者のお家へお邪魔し、チャイを



日本人が珍しいようで、興味津津の様子。せめて英語がもつとできれば……と、少し後悔した。しかし、この街についてから出会う人たちが皆、佐々井上人に尊敬の念を抱いているのが、ひしひしと伝わってきた。インドでは目上の人に敬意を表す際、相手の足に手を触れてから、自分の頭を触り倒地礼をする。形式的な部分もあるようだが、佐々井上人に対しては、一切そんなことを感じさせられないほど熱心にやられていた。また、昨年ようやく修行を終えた私にも、同じように尊敬の念を込めて、倒地礼してくださった。このときの周りの方々の敬虔な姿を御見受けし、ようやく「この方は菩薩だ：」と実感することができた。あまり、ご自分の功績などをおっしゃらない、謙虚な佐々井上人。後になって気付いたが、昨日シルプール遺跡を案内してくださるとき、いつも日陰に我々を入れてくださり、自分は日向でお話をされていた。インドの日向は、容赦なく刺すような日差しが照りつけるため、簡単にできることではない。ましてや八十二歳のご高齢……。さりげないことだが、自分より他人を大切に

する教えを実践されており、本当に頭が下がった。

開催が近づくにつれ、続々と人が集

まってきた。毎年三万人程の方々が集うという。日本ではそんな規模の仏教行事は滅多にない。さらに、インド仏教徒は信仰熱心な方が非常に多い。そんな行事へ日本人として参加できる光栄さたるや、これほど僧侶としてありがたいことはない。開催前、毎年持ち回りで昼食をふるまうて下さる仏教徒のお家へお邪魔した。ダライラマ法王は来られなかったが、ネパールの僧侶が五名ほど、そして、佐々井上人の活動拠点、インドラ寺の僧侶が十名ほどが合流し、共に昼食をいただいた。家庭の味はありがたかった。外食やホテルの食事は辛すぎたり、こつてりしすぎたため、胃がついていかなかった。更に、辛いものが苦手な佐々井上人のために、ほとんど香辛料を使っておらず、食べ易かった。我々のことを思い、心を込めて料理して下さったことが伝わってきて、元氣をいただくことができた。

昼食後、晴天に響き渡る大砲の轟音とともに、ダウンガルガル世界仏教徒大会が開催した。あまりの衝撃音に、思わず身がすくんでしまった。ダウンガルガル市街地から、プラジュニヤ山の黄金大仏まで三キロほど道のりを、参加者と共に行進する。道中、アンベードカル博士像へ花輪を掛け、寺院で



御祈りしながら、インドの方々とともにした。鼓笛隊による勇壮な演奏、子どもたちの元気な姿、熱心な信者さんの方々……日本では感じられない、躍動感、エネルギーに満ち溢れていた。その声援に鼓舞されるように、炎天下の中、誰一人倒れることなく、日本人も歩ききることが出来た。

プラジュニヤ山を降りた後、州政府関係者の演説や、インド舞踊を拝見。夕方になるまで、皆それぞれの想いを主張した。日本人を代表して佐伯さんが演説。かつて日本が犯した戦争の過ち、それを止めようとした佐々井上人の御師匠様について語り、大会は盛大に幕を閉じた。会場を後にしようとす

るも、熱心な信者さんに握手や写真を求められ、なかなか車へ乗れない……。ありがたいことだが、連日の強行日程もたたり、疲労困憊で一刻も早くホテルへ帰りたかった。岐路に立ちよった喫茶店で、佐々井上人から「よくやりましたね!」と、感謝の言葉をいただき嬉しかった。一時は体調も悪くなり、どうなる事かと思ったが、何とか無事に終えることができた、一安心できた。大変だったが僧侶としてこれほど注目していただく機会は滅多にない……。改めて、参加させていただき大変光栄でした。最後に佐々井上人から「来年は日本のお坊さんを二百人ほど連れてきてくれ!」と言われて「どうしようか……」と佐伯さんと顔を見合わせ、苦笑してしまった。

翌日二月七日、早朝八時頃までゆっくり過ごせたため、すこし身体を休めることが出来た。この日は佐々井上人が最も重要視している、マンセル遺跡を見学。ナグプールから北東へ三十キロ程の地点にあるこの遺跡は、佐々井上人が龍樹菩薩の靈告に従って発見した、南天鉄塔と目される遺跡である。遺跡の台座に刻まれている連弁の彫刻、辺りに漂う薄荷の匂い、遺跡を囲むように取り巻く湖、京都仁和寺秘蔵の南天鉄塔図と酷似していることな

ど、いくつもの証拠を目の当たりにし、胸が躍った。

マンセル遺跡の頂上で、佐伯さんを中心に念誦法を修法。少ない人数ながら、滞りなく勤めることが出来た。

私が属する真言宗では、龍樹菩薩が開塔した際に唱えたと言われる四智梵語を大切に継承している。この度、佐伯さんのはからいもあり、四智梵語（庭讃）を唱えさせていただいた。またしても、身に余る貴重な体験ができた。

また、龍樹菩薩大寺では、最近取り組み始めた、『金剛流御詠歌』を数曲奉納させていただいた。未熟なため、音程を外してしまうことも多々あつ



たが、声が響きやすい空間が功を奏し、近所に住むアングリマーラさんにえらく気に入っていただいた。インドの方に親しまれるとは……日本独自の旋律で、異国の方にはどうかと思っていたが、音楽に国境はないとはまさにこのことだ。次回は胸を張ってお聞かせできるよう、唱えこむことにする。

この日最後に案内された、ナグプールの過疎地域にある病院は、近隣住民の頼みの綱となっている非常に重要な場所だった。運営には多額の費用がかかり、日本から援助してもらっていたが、会計を任せていた現地スタッフ（インド人）にお金を持ち逃げされ、一時運営できなくなる事態まで陥ったそう。インドの人のためにやっている、裏切られる……。しかし、心折れることなく、もう一度やり直したという。普通の人ならできないが、何度ものこんなことを経験されているという。やはり、並の精神力ではないな……と改めて感服した。

この場所で、佐々井上人にどうしても聞いてみたかったことを尋ねてみた。「どうやって、七日間の断食をはじめとする辛い修行を耐え抜いたのですか……恐怖はなかったのですか……」と。すると、こう答えて下さった……。「私は色々やったけど、ある

とき恐怖や苦しみに打ち勝ったことがある。日本で修行しているとき、雪山にこもって修行することにしたんだ。雪山用の登山靴を買ってねえ。リュックを背負って。雪山に登ってお堂にこもり、一生懸命拝んでいた。夜の十二時を超えると、本当に寒くなってきたねえ。身体感覚もほとんどなくなってきた。そしてついに、頭がぼおつとしてきた。私は一体何をやってるんだろう……。気が狂いそうになって、正気を保つために、近くの石をもって頭を思い切りたたいたんだ……。すると、思いのほか出血して焦った。そして祈ったよ……。神様仏様、助けて下さいと、もう必死で。すると、しばらくして『恐怖』がスーッと抜けていった……。そこで思わず、立ち上がって『勝った!』とさけんだよ。いきおいで段差から転げ落ちてしまつて、頭を打って気絶しそうになった(笑)。その後は落ち着きを取り戻したが、寒さはひかなかった。明け方、東の空から太陽が昇り、じんわりと体が温まってきた。そして、生き返ったと。」つづけて、最後にこう言われた、「やはり人間ですから、生きるというところに執着はあります。だけど、苦しみから逃げれば逃げるほど、余計に苦しくなる。苦しみと一体になる……。ということが肝心ですな。」と。

私にとって心の中の霧を晴らす、核心に迫った答えだと感じた。というの、仁和寺での修行の最中、体力・精神力ともに限界が近づき、満身創痍の状態が続く、ここから先は命が危なくなるといって『恐怖』を感じて、どうしても越えられない壁があった。ある程度の苦しみを受け入れることはできたが、全てを受け入れることはできなかった。生きること執着し、手を抜いてしまうこともあった。そして苦しみのあまり、仲間を思いやることよりも、自分を優先してしまう…。異なる考え方を持った相手を理解し、妥協点を探るのではなく一方的に服従させる…。追い詰められてときの、人間の本性というものを目の当たりにし、私は深く絶望した。

しかし、佐々井上人とお話していて、そんな人間の醜い部分を否定するのではなく、受け入れることが第一歩なのではないかと思えるようになってきた。良い部分も悪い部分も両方合わせもつ人間らしさを…。佐々井上人は自らのことを『人間失格・世紀の苦悩児』とへりくだっておっしゃる。察するに、どん底からを経験され、這い上がってきた方だろう。なんだか、自分のことを諦めかけていた私の心を見透かされるようだった。

また、佐々井上人は妙法寺式に則った断食行から、不可触民の救済運動など様々なことをやられている。そのすべての行ないの結果、今の御姿に至られた。御釈迦様が苦行林を抜け、菩提樹の下で瞑想しながら森羅万象を理解し悟られたように、教義に則った修行以外でも、徳を積むことができる…。そして悟りの境地へ達することが出来るのではないだろうか…。

この旅を通じて、得るものは大きかった。形には残らないが、私の心に深く影響を及ぼし、いずれ形となってあらわれるはずだ。最後に、私を誘って下さった佐伯さん、同行してくださった林さん、前田さんに心から感謝の意



をお伝えしたい。また、インドで出迎えて下さった亀井さんをはじめとする、現地の方々。現地ガイドのカーンさん…。そして、日本を離れて五十年…不可触民の解放運動をはじめ、数々の功績を残され、インドの地で大日輪中天普照の大義を感得された佐々井上人。私のような若輩者にはもったいない、数々の体験をさせてくださり、本当にありがとうございます。この経験を生かすも殺すも、これからの行ない次第だと、肝に銘じて、日々精進致します。

シルプルより。(6)

インド・シルプル在住
平野文興(大頭龍興)

今回はシルプル便りではなく、バンテージのお寺のあるナーグプールからの便りです。

読者の皆様の中には、佐々井上人の常駐するお寺、インドラブツダビハールに何度か行かれた方もおありかと思えます。

それだけでなく、いろんな情報が得られる中、私が今更、紹介するまでもないとは思いますが、私なりの見方で、お寺周辺のようなすをお伝えします。

本来なら、私は、シルプルのお寺に滞在しているのですが、そこへ割合長く滞在しているにも関わらず、バンテージから

「ヒンディー語は喋れるようになってないし、お経も憶えていない。だからナグプールのお寺に来て、勤行に出て、お経を覚え、ヒンディー語も話せるようになりなさい。」

とご指示を受け、恥ずかしいやら、バンテージの近くに居られるという嬉しさやら、複雑な思いをしました。お寺の近くにあるバンテージ所有のゲストハウス(寝泊り用の家)に約三カ月半滞在しました。その時の様子です。



この家には、バンテージのお弟子、26歳のナーガナンダさんが管理人として常駐しています。ナーガナンダさんは小さい頃、両親から離れ、バンテージが親のようになって、面倒を見てくれたとのことでした。今回は彼が私の面倒を見てくれました。

読者の中には、滞在した方もおられるでしょう。

ここから、バンテージのお寺まで徒歩で片道 12〜3分です。

お寺では毎日、朝と夕方二回、6時から 勤行がだいたい 1時間 10分〜20分くらいあります。

これに出なさい、そしてヒンディー語を覚えなさい、とのご指示です。しかし、上人のご指示とはいえ、若い時ならいざ知らず、この歳(70歳)でヒンディー語、さらにパーリ語のお経を憶える、なんぞは、目で、ピーナッツを噛めと言われているようなもので、「師匠というものは、大抵、無茶を言うものだ」、とあらためて思い知らされています。

でも、朝夕のお寺への行き帰りには、学校の前や、住宅地を通り抜けて行くのですが、このひと時が何とも言えず、良いものなのです。

このナグプールという街は、凡そ70年前、Dr. アンベードカルが、自らの宗教であった、ヒンドゥー教をすて多くの(30〜60万人とも言われていますが……)人達と共に 仏教徒になる事を高らかに宣言した場所であり、仏教徒にとって、大変重要な記念の街です。

アンベードカルは、この宣言をした後、僅か2ヶ月後に亡くなってしまいました。

ヒンドゥー教を否定した為、一説では暗殺されたのでは、とも言われています。あのガンディーもヒンドゥー教徒ではあっても、ヒンドゥー教至上主義者によつて 殺されてしまいました。ガンディーと対立した彼も狂信思想者によつて同じ運命に見舞われたのかも知れません。

アンベードカルが突然亡くなり、約20年間、しつかりとした指導者を失った仏教徒達の前に、このことを何にも知らなかった佐々井上人が突然現れたようです。

佐々井上人のお話によれば、此処へ最初に訪れた約50年前は、日本の戦後の焼け跡のようなバラック作りの

家々が建ち並び、下層階級の人たちが多く住むヒンドゥー教徒の町であつて、喧嘩や、時には殺人さえも 日常的にあつた、危険なところだったそうです。

そんな街が、今では、高いビルも多く、インド中でも 仏教徒の割合が最高に多い街となっているのです。

佐々井上人は、仏教徒として、当時は団扇太鼓を叩きながら、時には飛んで来る石つぶてに耐えながら 布教活動をし、少しずつ、近隣の人びとの理解、信頼を得て 各地にお寺や、アンベードカルの像を建てて行きました。そして今や、インド仏教徒の最高指導者として、そのご老体に自ら鞭を打ち、精力的に活動しておられることは、皆さまご存じの如くです。



佐々井上人のお寺は主要道路からは少し離れてはいても、このお寺のせいでいわゆる門前町を形成して来ているのでしよう。お店や屋台がポツポツと、寺の

周りに出来てきています。私は朝夕の勤行の帰りに、牛乳、パン、お菓子、時には屋台の野菜など、買つて帰ります。

ヒンドゥー教にはお祭りが多いのでしようか？時々、家の前に、色のついた砂で綺麗な絵が描かれます。殆ど家の入り口に、子供や、大人達が、手に握った様々な色の砂を少しずつ落として絵を描いて行きます。見ている方も楽しいです。それぞれ個性的な砂



絵が出来上がっています。ランゴリーと言うのだそう です

お寺への往復には、私の格好が、坊さんの姿ですから、会う人ごと、それこそ、老若男女、多くの人が、挨拶してくれます。

インドの挨拶は「ナマステ」と言うのが一般的なのですが、此処では、「ジャイビーム」です。

ジャイとは勝利、ビームとはアンベードカルの名です。

ですから「アンベードカル！、万歳！」くらいの意味かな？、と私は思ってますが、挨拶は何でも「ジャイビーム」です。

おはよう、こんにちは、こんばんは、ありがとう、さようなら、………と、これを言葉に出せば、気持ちを通じ合えるような気がします。

特に、未来を担う子供達が素晴らしいのです。

歩いてみると、道端で遊んでいた5〜6歳の子供達が時には、後ろから追いかけて来て、私の前で腰を折り、或いは、ひざまづいて、足をさわり、その手を彼らの額につけて、合掌しながら「ジャイビーム」とやります。

3〜4歳くらいのお人形さんの様な目のくりつとした幼い子ども達が可愛い声でジャイビーム、と。これをやられると思わず抱きしめたくになります。

また、親に抱かれ、或いは手をひかれた幼児に対し、その親が「ほら、お坊さんだよ、ジャイビームしなさい。」

と教えてます。

自転車の子供、通学途中の学生、バイクに乗った若者、家の前の地べたにいつも座っているお婆さん、屋台の野菜売りのおじさん お婆さん、………：。もう、あらゆる人達が勿論全員とは言えませんが、目を合わせれば、言葉には出さなくても片手、或いは両手合掌をして、挨拶してくれるのです。

時にはどこから聞こえてくるのか？と探せば、ビルの上からの声だったりします。

ただ、こちらにしてみれば、いやいや、そこまでの挨拶をされる程の人間ではないし、恥ずかしい思いの方が先に立ってしまうので、やめて下さい、という思いがあつて初めの頃は何と言っても良いのかわからず、ただ黙って合掌しているばかりでした。

しかし、しばらくして、その思いを止めました。

挨拶をして下さる人たちから、私に対し、

挨拶を受けられるような人間になつて下さいね！

お婆さんからは、あんた、挨拶はキチンとするんだよ！

子供達からは、やさしい、お坊さんになつてね！
と言われているのだ。と思うようになりました。

一般的に、外国人にとって、インドは、何が起きるかわからない、怖い、というイメージがあると思いますが、ここ、ナグプールに関しては決してそんなことはありません。

夜、暗い道を一人で歩いてても、危険を感じたことなど一度もありません。

こんな平和な地域になるには、Dr. アンベードカルの基礎作りがあつたわけ継ぎ、《石つぶてが飛んで来る街からジャイビーム》と言う挨拶が飛んで来る街へと変貌させ、此処までこの街を作り上げてきた 佐々井上人の力の凄さを思い知るのです。

まさしく、世のため、弱い立場の人の為、自らの命を失う事さえも厭わない、バンテージの、生活模様や、人間性に触れると、菩薩道を行くその姿に、ただ、ただ、感動するのみです。

お寺は、常に開放され近隣の人達の集会所の様な役目もしているようです。

勤行は、どの国でも同じでしょう。礼拝に始まり、三帰依文、五戒文、この後仏法僧に関する何やら、を唱え、その後、何やら、その後、何やら、その後、なにやら………。ですが、全てパーリ語ですので、お釈迦様のおられた時代と同じ言葉でお経を唱えているのだ、と思うとある意味では、感慨があります。

しかし、およそ1時間半。日本のお経の唱え方とは違つて、お経に節をつけて歌う様にお経を唱えます。お唱えが出来ない私としては、坐禅のつもりで黙々として座っているだけです。で、皆の唱えているお経が心地よい子守唄となつてくるのです。

でも、永平寺と違い、警策がバシツとくることがないので、気がつけばいつしか終わりに近いといった日々です。

お経が読み終わると、最後には 参列者と一緒に【ジャイビーム、ジャイビーム、ジャイビーム】と何度も大声で拳を突き上げ氣勢をあげます。

今迄 厳肅な雰囲気だった堂内が、一気に 皆の心が一つになったようでとても気持ち良いのです。

早く、お経を覚え、ヒンディー語も話せる様にならないといけないなと思つている今日この頃です。

ナグプール滞在支援隊

昨年(2017)の10月12日から今年2月12日まで4か月の長期間、第5次支援隊としてナグプール入りし佐々井上人のお世話をしてくれた亀井佑二さん。佐々井秀嶺資料室フェイスブックにバンテージの活動やナグプールの日常、インド人スタッフの紹介など投稿していただきました。期間中にはチャンドラプールでの改宗記念式典や12月6日アンベードカル博士の涅槃日、OBC(指定カースト、指定部族以外の後進階級)改宗式、下層民衆抗議の進行、アンベードカルカレッジでの会議、お寺の落慶式、各地での仏教徒大会など連日行事が目白押しで、忙しいバンテージを日々サポートされました。また画家でもある亀井さんはバンテージの依頼でマンセル、龍樹菩薩大寺、龍樹山の絵を描いてインドラ寺に納めています。10月の改宗記念式典でインド仏教徒に改宗した亀井さんは、更にバンテージにより得度、僧名「竜亀」となりました。現在はインドで授けられた臍脂色の袈裟を着けて、広島の宮島弥山の上でおにぎりを販売しながら菩薩道を前進中。亀井さん、ありがとうございます！

振り返ることができない南天会の派遣員としてバンテージに随行させて頂いた四ヶ月間。私にとって後戻りのできない時間となった。

きっかけから不思議なご縁に導かれ、バンテージの行動に満ちた人生を自分の糧にしたいと思い、導かれるままにインドへ渡った。

考えることや準備など何もせずただ向ければご縁であるとした。

バンテージと初めてお会いし挨拶を交わしたのは2016年10月12日、改宗式広場での事であった。「これからよろしくお願いします。お会いできて光栄です。」とバンテージの手をとり挨拶した。後でバンテージはご病気の為、手をギョツと握られると痛みが走ると聞いた。そのような事はおくびにも出さずやさしい笑顔で迎えて下さった。

「お前はまだ機根が浅い」、「宿業が深い」、「お前は餓鬼か畜生か、いや人間界か」と、インドでの生活はこのようなバンテージのお言葉

から始まった。

その一ヶ月後にはバンテージの弟子となりお坊さんにして頂くこととなった。

この四ヶ月間という時をどうしてもまだ振り返る事ができない。あまりに深く大きいのだ。

滞在中、書き留めた詩を記録としたい。

一つ一つ、一時一時をインド民衆の為に捧げ、民衆に愛されているバンテージ。

振り返るな突き進め

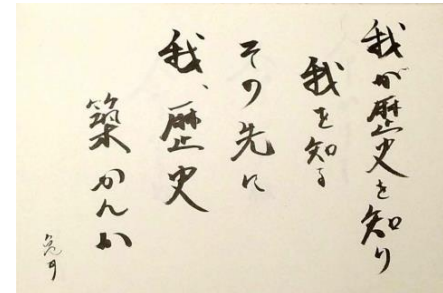
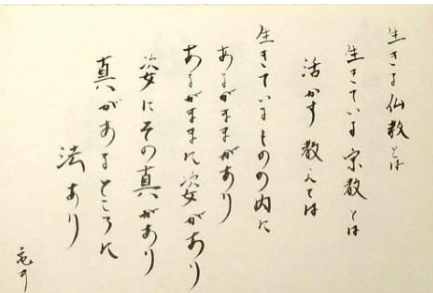
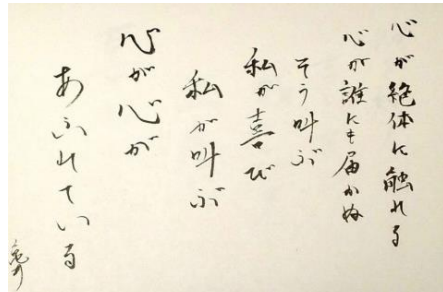
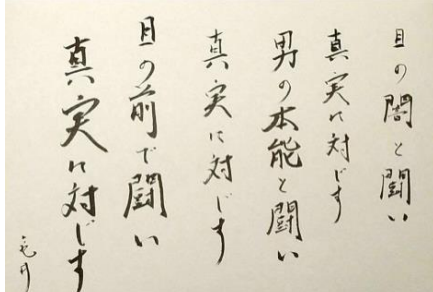
我が道をいけ

決して忘れるな

今はそのような言葉が聞こえてならない。

竜亀

(南天会第5次派遣員 亀井佑二)



インド古代仏教遺跡調査の協力者を募る

---大乘八宗の祖とされる龍樹(DC150?-250?)ゆかりの南天鉄塔探索のロマン---

岩崎好規

場所 インド中部マハーラーシュトラ州ナーグプル(Nagpur)北方約 50km に位置する仏教およびヒンズー教の遺跡とされるが、インド政府考古学調査所(ASI)Home Page では Ancient Buddhist Remain としている。

ヒンズー教の不可触民に平等を唱える仏教への転向を 50 年導いている日本人僧侶佐々井秀嶺師(82)が布教のため Nagpur に来たとき、「ナーガルジュナ(龍樹)」に関連した地名があるのを聞き、調査したところ仏像などいくつかの仏教遺跡の痕跡を発見した。この地に仏教遺跡があると確信を深めた佐々井師は長年に亘り調査を続け、1995-2005 年間自費で発掘し、現在ではマンセル湖(Mansar Reservoir)の南東域に 2kmx0.5km に 5 つの遺構が確認されている。佐々井師はこの地に南天鉄塔があるのではないかと考えて、遺構発掘の継続を考えているが、現在ではインド政府考古学調査所(Archaeological Survey of India ASI)の所管となっていて、一般人の遺跡発掘調査の許可は困難である。佐々井師は、仏教を理解する日本の発掘研究専門家からの支援協力を求めている。

遺構は MNS1, 2, -- 5 と命名されている。すべて煉瓦を構造部材として使用し、最大は僧堂(MNS1)遺構である。



図 1 マンセル遺跡位置図



図 3 MNS1 Monastery (僧房)



図 2 マンセル湖から南方を望む
(蓮の花咲く Mansar Reservoir の丘の西に MNS1, 東に MNS3)

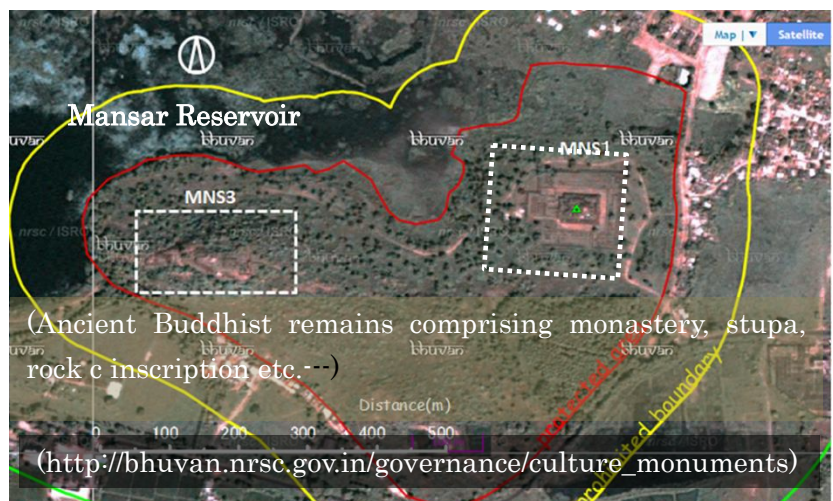


図 4 Mansar 遺跡(ASI(印度考古学調査による保存領域(古代仏教遺跡と注釈がある))

佐々井師は、MNS3 の遺構(図 5)に南天鉄塔の夢をかけている。MNS3 遺構は、岩の丘の上に煉瓦を積みあげているが、印度では他に例があまりない蓮弁を想起させる形状をモチーフとして多用している特徴を有する。MNS3 遺構には、中心の舍利塔(Stupa)に向けて 2 つの穴の出入り口がある。



図 4 仏陀像の設置跡か？



図 5 MNS3 平面図



図 8 蓮弁模様レンガ積構造



洞内祠堂への入り口

図 6 Entrance Cave Shrine 1

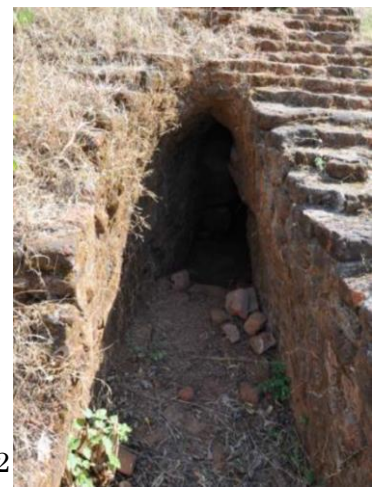


図 7 Entrance Cave Shrine 2

これらの穴は、舍利塔直下の岩盤中にあると想定される岩盤洞内祠堂に向かう出入り口であると考えられるが、約 15m 程度で祠堂に達する見込みで、この洞内祠堂発掘に夢がかかっている。入口数メートルの位置で崩落しているが、トレンチ調査は壁面に木製支保工を用いて坑壁を支持すれば、可能であろう。ASI の HP の本遺跡の項には、次の注意書きがある。

Authenticity and validation of the location of the sites and monuments is in progress(本遺跡の特徴や位置などは調査進行中)



図 9 MNS3 の側面

インド考古学調査所の A.K.Sharma 博士が先行実施しているが、仏教遺跡ではなくヒンズー遺跡として記載されている。仏教遺跡としての調査が欠けていることに佐々井師は懸念を示している。

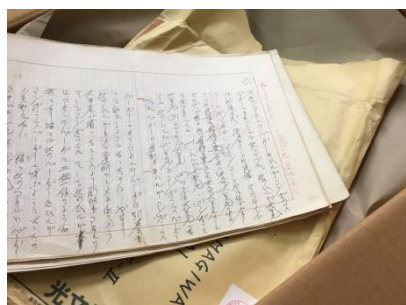
本件に興味ある方は、南天会佐伯隆快(090-5304-8955)あるいは岩崎好規(090-8938-1191/ yoshi-iw@geor.or.jp)までご連絡ください。岩崎好規(日本イコモス第 18 小委員会主査:遺産地盤学)は、1994 年以来日本国政府アンコール遺跡救済チームの地盤班で遺跡地盤研究に 20 年以上従事している。昨年 2016 年 12 月インドに会議出席の折に、Nagpur を訪問、現地を視察しました。佐々井師の Mansar の夢の実現には日本からの支援が必要であると思い、皆様にお知らせしています。

2017/3/14

(佐々井秀嶺資料室からのご報告)

平成 28 年度科学研究費助成事業「インド被差別民解放運動と仏教復興運動にみる当事者性の獲得に関する宗教人類学的研究」に関する資料のデジタルアーカイブ化作業実施事業として、B. R. アンベードカル及びエンゲージドブディズム研究会 助教根本達さんと 2016 年 12 月にデリーに行き、以前からデジタル化を進めていた紙資料（ダンボール箱およそ 50 箱）を日本に移送するため、梱包、発送作業をしてきました。

資料は日本に到着後仮倉庫に保管されます。今後、4 年間を目安に資料整理を進めていきたいと思います。これから写真撮影、書き起こし、ナンバー整理など、様々な作業が始まります。皆様のご協力よろしく何卒お願いいたします。（小林三旅）



佐々井秀嶺資料室フェイスブックより（第5次支援隊亀井さん撮影）



お布施の代わりにもらったクマのぬいぐるみに癒されるバンテージ。



OBC改宗式
ヒンズー教徒の後進階級（Other Backward Classes）の人々が仏教に改宗した歴史的な日。



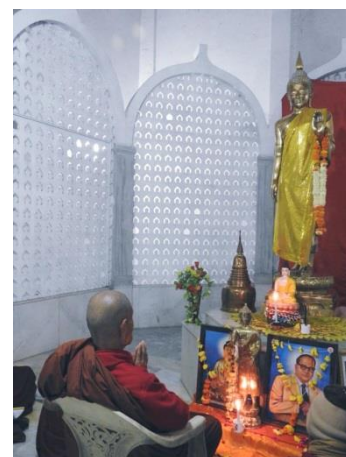
下層民衆抗議の大打進で先頭を歩くバンテージ。
この大打進は回教徒、キリスト教徒、仏教徒、OBC組織など各宗教、組織の民衆が一同に集まり行われました。



お寺の落慶で女性に囲まれるバンテージ。



アンベードカルカレッジにて。



1月17日阪神淡路大震災の追悼。インドラ寺にて

南天会会計報告(H28. 11. 1~H29. 2. 28)

(単位 円)

月	日	摘要	収入金額	支出金額	差引残高
		前期繰越			547,800
11	10	NHKラジオ出演料 ※1	41,040		588,840
11	30	会費・支援金(振込)	130,500		719,340
12	4	本売上	1,400		720,740
12	5	インドへ荷物発送(食品等)		5,000	715,740
12	6	岩崎好規マンセル視察交通費・宿泊費援助※2		22,980	692,760
12	12	インドへ荷物発送(2箱/食品画材等)		16,000	676,760
12	12	郵送料		492	676,268
12	14	龍族7号印刷代		31,400	644,868
12	14	角2封筒印刷代		19,800	625,068
12	14	龍族8号印刷代		42,200	582,868
12	14	2月旅行日程案内コピー代		4,428	578,440
12	14	エアメール(龍族海外発送分)		1,170	577,270
12	16	第6次滞在支援隊援助(交通費) ※3		123,320	453,950
12	17	名古屋交流会本売上	6,700		460,650
12	30	会費・支援金(振込)	251,000		711,650
12	30	振込手数料		80	711,570
12	30	会費・支援金(現金)	30,000		741,570
1	3	本売上	3,200		744,770
1	30	上人購入依頼品(本・薬等)		27,835	716,935
1	30	会費・支援金(振込)	105,000		821,935
1	30	振込手数料		80	821,855
1	30	会費・支援金(現金)	10,000		831,855
2	8	佐々井上人へ支援金 ※4		300,000	531,855
2	18	第6次滞在支援隊援助(保険その他) ※3		50,000	481,855
2	28	会費・支援金(振込)	1010,500		1492,355

※1＝2016年7月3日に収録したNHKラジオ「宗教の時間」の佐々井上人出演料です。

※2＝マンセル遺跡再発掘プロジェクトアドバイザーの岩崎好規先生が、インド滞在中にマンセルを視察いただきました。

デリー～ナグプール往復交通費と宿泊代を南天会から支出しました。

※3＝第6次滞在支援隊は、秋吉紀幸さんが2月22日～5月の予定で滞在中です。

※4＝2月4日出発の南天会ナグプールツアーの際、事務局佐伯が佐々井上人に直接お渡ししました。

【特別支援金寄附者御芳名】 ※上記期間に年会費とは別に南天会に支援金をいただいた方のお名前です。

岸信一郎様 10000 円 佐々木恭治様 10000 円 島本久嗣様 5000 円 武田英敬様 1500 円

武山博子様 5000 円 田中則子様 10000 円 遠山睦子様 10000 円 土岐信子様 50000 円

福瀬くに子様 10000 円 前田卓幸様 1000000 円 森下正志様 10000 円

奥平心月様より切手をいただきました。その他、世話人賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

◆南天会現況 (平成 29 年 3 月 25 日現在)

正式会員数 168 名

賛同人 (50 音順)

漆間宣隆 (浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月 (釣月庵庵主)

織田隆深 (高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

黒澤雄太 (剣士・日本武徳院師範)

小池一郎 (株式会社マクシス・シントー常務取締役)

島影 透 (株式会社サンガ社長)

高山龍智 (佐々井上人お弟子)

土屋信裕 (頭本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰 (臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

増田璃澄 (仏国土をつくろう会会長)

宮淵泰存 (日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長)

宮本光研 (真言宗御室派元執行)

宮本龍勝 (佐々井上人お弟子)

山本宗補 (フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

※年会費について

会報『龍族』を送付する封筒の宛名ラベル右下欄に、会員種別、納入年度が記載されています。会費は年内にお支払いください。

6月佐々井上人来日！

昨年5年有効のビザを取得された佐々井上人が、本年も来日されます。日本滞在中は南天会が中心となってお話ししてまいります。会員の皆様には後日、日程や行事のご案内をお送りします。また来日活動費用の支援も受け付けております。同封の振替用紙にてお振込みください。

6月18日 午後1時～

平清盛生誕900年記念

佐々井秀嶺宮島講演

～南天龍宮城と平家一門

大本山大聖院観音堂

南天会告知のお願い

佐々井上人の活動、インド仏教の現状などまだまだ日本での認識は少ない状況です。会員の皆様には是非周知の程よろしく願いいたします。パンフレット等必要な方は、事務局までお知らせください。(南天会ホームページの「南天会について」の一番下からパンフレットPDFがダウンロードできます)

その他、ご提案等ございましたら是非ご連絡下さい。

会報『龍族』寄稿のお願い

当会々報は、年4回をめざして発行して参りたいと思います。会員それぞれの佐々井上人に対する思い、研究、インド訪問記など、是非ご寄稿下さい。原稿はメール、郵送等にてお送りください。皆様の声を取り入れた誌面にしていきたいと思います。(原稿料等はお支払いいたしません)

龍尾言

今年も6月が近づいてきた。日本で怠惰な生活に溺れながら、ふとフェイスブックを見るとバンテージは今日も朝早くから何百キロも離れた街に出かけ、大群衆に囲まれて演説し、豪華な昼食には目もくれずまた何百キロも車に揺られて帰っていく。やはりこちらも気合を入れて、やるべきことをどんどんやっていかないと、到底バンテージの後は追いつけられない。さて今年も帰って来られますよ！みんなで頑張りましょう！(佐伯隆快)

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1

一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快 (090-5304-8955)

小林三旅 (090-4538-2677)

南天会ホームページ www.nantenkai.orgメール nantenkai@gmail.com

佐々井秀嶺資料室フェイスブック

ご利用ください

